下町文化

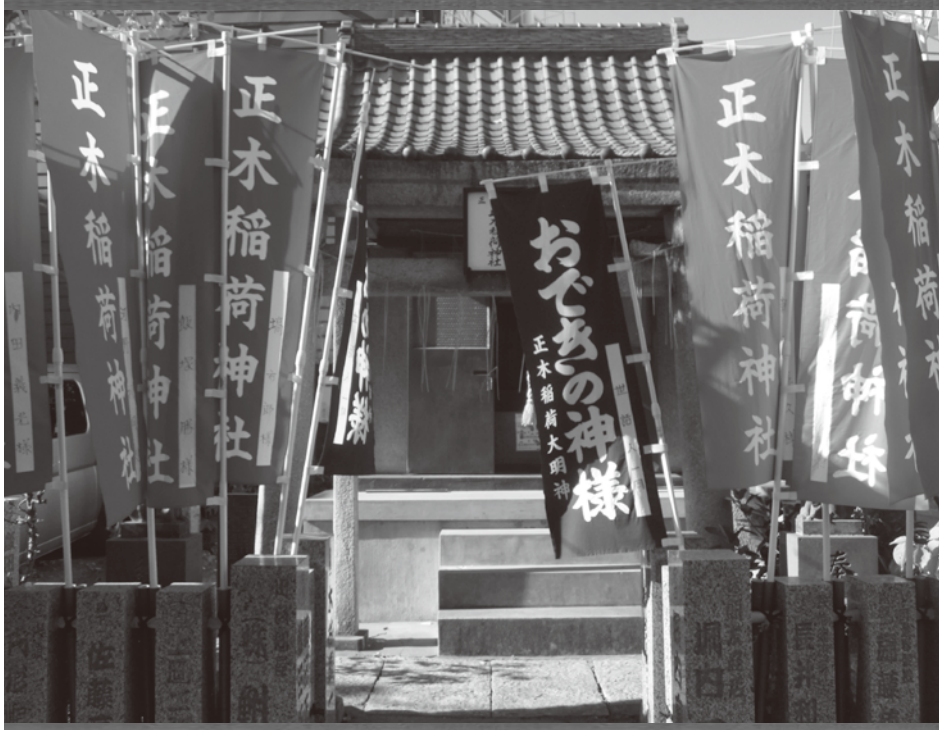
SPORTS & SUPPORTS
KOTO City In TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO. 310
2025.7.4

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
https://www.city.koto.lg.jp/

民俗調査団発足！

全国的に高度経済成長期を境に、従来の慣習・文化が大きく変化したと言われています。江東区でも例外ではありません。そのため記憶に残る暮らしのあり様を記録し後世に残すため、民俗調査団を結成して聞き取り調査を行うこととなりました。



正木稲荷神社（常盤1）

同社の由緒によると、境内に柾木（ニシキギ科常緑低木）が植えられていたことから社名となったとされています。柾木が腫物に効いたとのことから、おできなどの腫物などが治るとされ、江戸時代より信仰されています。詳しくは次頁をご参照ください。

○民俗調査団発足！
○令和7年度江東区民俗調査団
深川北部の歴史と民俗
○江戸時代の日用品①
化粧道具「柄鏡」について
○冥雲寺にあった
英一蝶の絵画作品
○中川船番所資料館　企画展
江戸・明治の旅とお金
○小・中学生版
文化財を考える

江東区における民俗調査は、昭和56年度（1981）から平成9年度（1997）まで継続的に行っており、調査終了後に報告書を作成してきました。そして、これらをまとめる形で『江東区の民俗』深川編、城東編の2冊を刊行しています。

28年ぶりとなる今回の調査は、深川北部（仙台堀川以北・横十間川以西）を対象とし、区の文化財保護審議会委員の高橋典子氏（民俗担当）を団長として迎え、公募で選ばれた団員（区民）20名により、聞き取り調査を行います。

話者については、原則として65歳以上の方を対象としています。高度経済成長期の急激な都市環境の変化により、それ以前の慣習などが大きく変容した時代の記憶を持っている世代です。

区の調査の特色は「区民自らが区民に話を聞いて、地域の生活文化を聞き書きにより発見するところ」にあります。さらに、聞き取った内容は後世の区民に引き継いでいくために記録に残し、本紙等でもご紹介していく予定です。また調査を通じて区民間の交流も生まれ、ひいては地域コミュニティーの形成につながることにも期待しています。

団員がみなさんのもとにおうかがいした際には、ご協力の程よろしくお願いいたします。

令和7年度
江東区民俗調査団

深川北部の歴史と民俗

はじめに

本年度、民俗調査を再開することを前頁で述べましたが、話者の世代は前回とは大きく変わります。前回は、明治末年から大正期に生まれた方々が対象で、幼少期から青年期（明治初期以降）にかけて経験された事柄が主に採集されました。ここでは、深川北部の歴史や前回調査での成果の一部をご紹介します。

深川北部の歴史

『町方書上』（文政11年〈1828〉）によると、深川の起こりは、摂津（現大阪府と兵庫県の一部）出身と伝わる深川八郎右衛門他6名が開発し、慶長元年（1596）に徳川家康との関わりの中で、名字の深川をもって、深川村と名付けられたことが、始まりとして記されています。なお、現在の深川神明宮付近（森下1）が「深川村発祥の地」として区の史跡に登録されています。

明暦の大火（明暦3年〈1657〉）を契機として、幕府により隅田川以東の本所・深川地域の開発が急速に実施され、武家地・寺社地が設定される中で、深川は町場（「町並地」）となり、江戸に組み込まれました。深川北部の六間堀、五間堀、さらに小名木川沿いには、面積の大きい武家地が設定され、深川神明宮周辺地は深川元町と呼ばれ町場として固まっていきました。

近代になると、武家地は宅地、工場となっていきました。城東地域（亀戸、大島、砂町）で重工業が発達したのに対し、深川地域は軽工業が発展していきました。以降、家内工業が盛んとなり、下駄、傘、蝋燭、ひな人形などが地域を代表する物産となり広く知られていました（『東京府志料』）。

深川北部の民俗―都市の民俗―

前回調査時の平野榮次民俗調査団団長は、従来の民俗調査が農村を対象としたものであったことを踏まえて、江戸時代以来町場化していた深川北部の調査において、従来の民俗学の手法による調査が適応しないことを指摘しています。

また、折しも、当時は、都市の民俗に関心が寄せられていた時代と合致していました。民俗学は、その学問的基礎を築いた柳田國男（1875～1962）に代表されるように、農村・漁村を調査対象にして、そこに暮らす人々から聞き書きして、生活様式・伝統文化（ならわし、しきたり、言い伝え等の民俗事象）などを明らかにするところから始まりました。柳田の時代の民俗学では、農村社会では、江戸時代からの連続性が見て取れるが、人や物に流動性がある都市では、従来の民俗学の調査方法で成果を得ることができるかが、前回調査時の課題でした。

このような懸念がありながらも、前回の調査では、深川地区の特質を捉える様々な成果を得ることができました。次にその一部を紹介していきます。

前回調査の紹介（一部）

深川北部はかつての江戸の市街地であり、明治以降も商人や職人とその家族が仕事と生活をする地域でした。例えば、江戸時代以来の鳶がいて、鳶頭は日常では相談役となり、火事の際には、消防員の下で消火にあたったり、祭礼や行事などの際にはこれを取り仕切っていたりしたことが話者によって語られています。

正木稲荷神社（常盤1）には、様々な民間信仰が集中していたことが述べられています。できものの治療、不妊女性への子授け、海運業者の海上安全などの祈願と利益で人々の信仰を集めていたことが分かります。

海上安全のための祈願では、海運業、問屋（豆屋・米屋）の信仰者が多く、讃岐の金刀比羅神社（現香川県琴平町）への奉納と同様、空樽に幟を立てて海へ流すことが行われていました。

古くから信仰されていた「おでき」では、盛そばを経木に入れて、神殿においてお参りをして帰ってきて乾いたらおできが治るとされ、さらに、柾木がおできに効くと言われてきたことが語られています。同社では氏子がなく、崇敬者は日本橋（現中央区）の人々が多く、世話人を服部時計店（現セイコーグループ株式会社）がつとめていました。

おわりに

今回の調査目的は、前回調査と現在までの期間の空白を埋めていくことにあります。特に、前頁で述べたように、社会のあり方や慣習が大きく変化した高度経済成長期前後に青年期を過ごした方々（話者）に聞き取りを行うことで、新知見を得るとともに、最終的には前回調査との差異が明確になっていくものと思われます。

また、将来への課題も出てくると思います。今後は、聞き取りした内容を記録として留めた後、分析・考察を行い、さらにその成果を歴史学など他の学問領域とともに、学際的に地域社会の特質を明らかにする研究へと結び付けていくことが重要だと考えます。

（文化財専門員　大関直人）

江戸時代の日用品①

化粧道具「柄鏡」について

はじめに・深川江戸資料館の紹介

深川江戸資料館は、江戸時代の水運流通で栄えた深川佐賀町（現佐賀1・2）の情景を再現した展示を行っております。再現した家屋や商店に住む人の家族構成や職業を詳細に設定し、それに応じた仕事道具や日用品が展示されています。今回は、江戸時代の化粧道具「柄鏡」についてご紹介いたします。

長屋「大吉」の柄鏡と鏡懸

柄鏡とは

古代から祭祀の道具だった鏡は、室町時代末期には化粧道具として日常生活に浸透していきます。代表的なものが、円形の鏡に柄が付いた「柄鏡」で、持ちながら自分の姿を映すことができるため、使い勝手が良く、身分を問わず愛用されるようになりました。

江戸時代前期の柄鏡は、持ちやすさを重視して柄が長いですが、島田髷や勝山髷などの結髪や多様な髪飾りの流行により、次第に大きな髪型を映し出せるように、鏡の面積が拡大していきました。普段、柄鏡は鏡箱に収納して、化粧をする時は鏡懸（鏡立）に置いて使用します。襟足に白粉を塗る場合は、別の柄鏡と合わせ鏡にして使うことができました。

鏡のメンテナンス

現在の鏡はガラス製ですが、明治時代初頭にガラス生産が可能になるまで、日本では主に銅を多く含む金属製の鏡が利用されていました。金属製の鏡は暗くて曇りやすいため、鏡面を定期的に研ぎ直す必要があります。研ぎ方は、粗粒の砥石や炭研ぎなどで丁寧に研いで、ザクロや梅の酸を塗ってメッキを施していました。

このような鏡のメンテナンスは、鏡磨（鏡磨師）と呼ばれた職人が行いました。鏡磨は富山の氷見地方出身が多く、毎年夏から翌年の春にかけて出稼ぎのために、摂津から関東地方の各地をまわりました。

鏡を研ぐ鏡磨（鏡磨師）
『鏡磨古圖』（『骨董集』）
（国立国会図書館
デジタルコレクション）

柄鏡の装飾文様

多くの柄鏡の裏面には様々な文様が鋳込められています。代表的なものとして二羽の鶴と蓑亀、洲浜に松竹の情景を模した「吉祥文様」が挙げられます。また、「難を転じる」という意味を持つ「南天」など、縁起物の装飾文様を、特に婚礼道具の柄鏡で見かけます。さらに自然の風景、和歌や古典文学を表現した文様など、当時の趣向が影響されている点も、柄鏡において興味深い要素です。

装飾「大文字」と鋳造製法「踏み返し法」

下図の柄鏡の背面には、大きな文字で「末廣」と鋳込んでいます。これは江戸時代後期に流行した「大文字」と呼ばれた装飾です。「末廣」「高砂」など縁起の良い意味を持つ文字が好まれました。

特筆すべきは、「大文字」が単なる縁起物にとどまらず、別の意義を持つという点です。金属製の鏡の生産技術が普及したことで、柄鏡は手頃な価格になり、需要に応じて既存の鏡から鋳型を取る「踏み返し法」によって大量生産が実現しました。しかし、繰り返し使用される鋳型の影響により、本来の文様の鮮明さが失われ、ぼやけた文様を隠す手法として、大文字が装飾された柄鏡が生産されるようになったのです。

展示室の柄鏡

さいごに

深川江戸資料館では、今回紹介した柄鏡を含む、現代ではあまり目にすることのない江戸時代の日用品が展示され、実際に触れて体験することができます。来館者様が当館を通じて、江戸庶民の生活スタイルを想像し、理解する手助けができればと考えております。

※参考文献
長野市立博物館『鏡の文化』
広瀬都巽『和鏡の研究』

（深川江戸資料館　伊藤友香子）

宜雲寺にあった英一蝶の絵画作品

本紙No.308で、臨済宗蒼龍山宜雲寺（白河2―7―10）にかつて存在していた英一蝶（1652～1724）に関する石碑「北窓翁退筆冢記」について記しました。今回は、かつて同寺にあった「唐獅子図」など一蝶の作品群について記します。

宜雲寺に存在していた一蝶の作品群

表は一蝶の作品が同寺に存在していたことを示す文献の記述をまとめたものです。『葛西志』によれば、寛政年中（1789～1801）に「屏風軸もの」を除く「客殿庫裡の画」はすべて失われたと見えますが、『深川寺社書上』や『御府内備考続編』などでは、微妙に記述が違うものの、「襖」「屏風」「掛物」（掛軸）と見え、江戸時代後期に存在していたことが分かります。

『罹災美術品目録』（昭和8年）など近代の文献では、「墨画獅子図襖」二十四枚、「十六羅漢諸祖禅機図屏風」一双（紙本淡彩）、「普化和尚図屏風」一双（紙本淡彩）、「開山卓禅和尚頂相」（絹本設色）、「雲龍図」三幅対（絹本墨画）が存在していたことが分かります。しかし、大正12年（1923）9月1日の関東大震災によってすべて失われました。

なお、「深川史料展覧会出品目録」（『深川区史』上巻、大正15年）の中には、宜雲寺所蔵の「英一蝶筆　六双屏風／同　掛幅」が含まれています。この目録は、深川区が区史編纂のため協力者から借用した資料1075点余が震災で焼失した時の被災リストです。これらは、『罹災美術品目録』掲載のものとは別の資料の可能性が考えられます。

一蝶筆の襖絵「唐獅子図」について

同寺にあった一蝶筆の作品の中でも、唐獅子を描いた襖絵（以下、「唐獅子図」）が代表的な作品であったようです。『罹災美術品目録』に見える「墨画獅子図襖 二十四枚」は、同寺本堂の正面と「前方反対の側」3間半（約6・4m）8枚と、左右各2間（約3・6m）4枚の計24枚の襖に「獅子群遊の図」を主として遠景の山並みや瀧、流水等を配していたことが分かります。

写真1は『深川区史』下巻（大正15年）に掲載された「唐獅子図」で、全24枚のうちの3枚と考えられます。メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国ニューヨーク州）所蔵の「舞楽図・唐獅子図屏風」の唐獅子図（舞楽図の裏面、六曲一双）と同様に墨で勢いよく描かれていることが分かります。また、写真1右の2頭の戯れる獅子などモチーフが相似していることも分かります（『没後三〇〇年記念　英一蝶』展示図録、サントリー美術館、令和6年）。なお、『世界美術全集』第23巻（平凡社、昭和3年）には同じ襖絵を別に撮影した写真が掲載されています（写真1の中央・右の2枚の部分に相当）。美術史家である藤懸静也（1881～1958）の

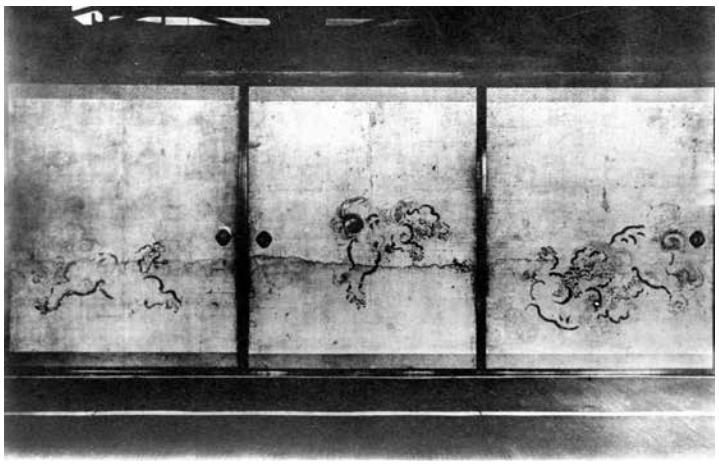


写真1　英一蝶「唐獅子図」
『深川区史』下巻（大正15年）

写真1・左（部分）

写真1・中央（部分）

写真1・右（部分）

表　文献に見える宜雲寺にあった英一蝶作品に関する記述

掲載誌	記述	発行年	備考
『葛西志』	「（前略）客殿庫裡の壁或は屏風の類をも悉く画きしかはそれより一蝶寺の名はおこりしとなりその後寛政年中丙丁にかゝりて客殿庫裡の画ハみな失ひしなり今は纔に屏風軸もの等のみ持伝へり（後略）」	文政4年（1821）	『御府内備考続編』に引用
大田南畝編 『続三十幅』巻九	「（前略）一蝶勝信帰国の後深川高橋黄（ママ）龍山宜雲寺に住みて、和尚へ形見にもと七十餘齢にして寺院の障壁にことごとく画す獅子客殿の脇に山水商山の四皓坐敷鳥と鷺杉戸屏風片ひら禅祖の図あるひハ六祖明上　おハれて草間に坐し衣鉢を石上に置又は普化禅師棺をひらき雲中に鈴をならしたるかた又ハ芋を焼き瓦を磨くなどの図也おしいかな大水後損したるか其後焼失せしや不審〇此伝は記後に録す昭元とあり」	不明 ※享和3年～文政6年 （1803～23）	英一蝶「朝清水記」 （元禄15年・1702）の付記。
『深川寺社書上』	「一　寺寶　英一蝶之画／襖二十二枚屏風二双／掛物三幅対一匣一幅物三箱　」	文政10～11年（1827～28）	文政11年8月23日記載
『御府内備考続編』	「寺寶／一襖　英一蝶筆　二十二枚／一　掛物　同　三幅対／一　同　三幅」	文政12年（1829）	
稲村坦元「深川史料を顧みて」 『中央史壇』第67号	「仲大工町宜雲寺には、本堂の襖に表が英一蝶筆の山水及獅子遊戯図、裏が高嵩谷の山水花鳥を描いたものが大物八本、小物八本あつて、大正六年水害後日本橋鰹節屋にんべん主人の寄進にて立派に修繕表装されたものが皆焼けた事は非常に惜しい。幸ひ写真丈けは手許にある。尚英一蝶筆当寺開山卓禅肖像、卓禅自賛のもの、一蝶筆六双屏風羅漢図。探幽筆瀧見の観音があつたが如何した事かと思ふ。」	大正14年（1925）9月1日	発行:国史講習会
「深川史料展覧会出品目録」 （『深川区史』上巻）	「宜雲寺蔵／英一蝶筆　六双屏風／同　掛幅」	大正15年（1926）年5月25日	発行:深川区史編纂会
『世界美術全集』 第二十三巻	「124　獅子図　英一蝶筆／宜雲寺旧蔵　（中略）この寺に一蝶が久しくゐたと伝へられ、襖の絵が遺されたのであつたが、明治四十三年の大洪水の時に、浸水し、この襖も害をうけたといふ。下から三分の一程の高さに、しみのあるのは、当時浸水した痕跡である。なほそれのみならず魔はこの絵を襲うて、大正大震災の時烏有に帰してしまつた。（後略）」	昭和3年（1928）11月10日	発行:平凡社
『大東京史蹟案内』	「震災前は英一蝶の画を多く蔵してゐたので俗に一蝶寺と呼ばれて有名な寺であつたが、震災で悉く灰燼に帰し一つも残つてゐない。唐獅子の襖等は一蝶の大作として殆ど唯一のものであつたが、惜しくも皆焼けて了つた。」	昭和7年（1932）10月25日	編集:一高史談会 発行:育英書院
『罹災美術品目録』	「一蝶の遺作数点ありしが、総て灰燼に帰す 一蝶墨画獅子図襖　二十四枚 　本堂正面内障三間半八枚、前方反対の側同八枚、左右各二間四枚、総て二十四枚獅子群遊の図にして、間々遠山瀧、流水等の配景（ママ）あり、裏面には別筆の絵ありしと云ふ 同　十六羅漢諸祖禅機図屏風　一双 　紙本淡彩　款曰、行年七十齢北窓翁一蝶筆 同　普化和尚図屏風　一双 　紙本淡彩 同　開山卓禅和尚頂相 　絹本設色　巾尺五 同　雲龍図　三幅対 　絹本墨画　巾尺二　蒼龍山の山号に因みてかけるもの（後略）」	昭和8年（1933）8月18日	編集:国華倶楽部 発行:吉川忠志

旧字は新字に改めた。

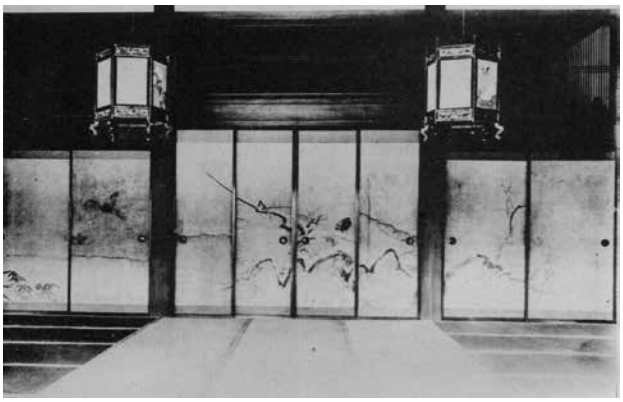


写真2　高嵩谷「雪中隻禽図」
『深川区史』下巻（大正15年）

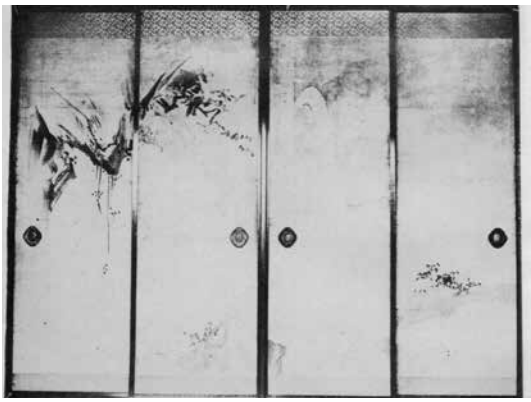


写真3　高嵩谷「瀑布倒懸図」
『深川区史』下巻（大正15年）

治43年（1910）の水害時の痕跡と書かれています。その他に、稲村坦元「深川史料を顧みて」（『中央史壇』第67号、国史講習会、大正14年）には、大正6年（1917）の水害後に、檀家総代であった「日本橋鰹節屋にんべん」（伊勢屋、のち高津商店。現株式会社にんべん）主人の寄進によって修繕・表装されたと見え、水害に遭いながらも大切に伝えられていたようです。

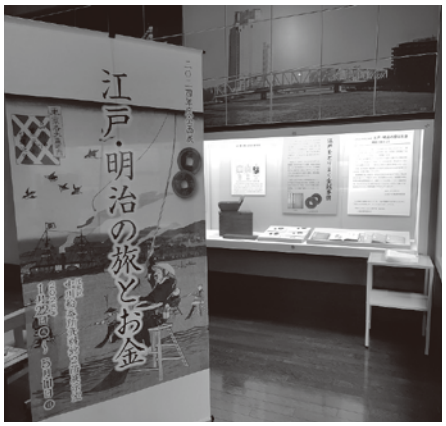
また、「深川史料を顧みて」には、「山水及獅子遊戯図、裏が高嵩谷の山水花鳥を描いたものが大物八本、小物八本あつて」と見えます。写真1と同様に『深川区史』下巻に、一蝶の孫弟子にあたる高嵩谷（1730～1804）筆の襖絵「雪中隻禽図」（写真2）、同「瀑布倒懸図」（写真3）の写真が掲載されていますが、写真1と同2・3を見比べてみると、引手金具は同じと考えられるものの1枚あたりの幅など規格が違うようです。

（文化財主任専門員　野本賢二）

解説文によれば、撮影は美術研究家の脇本樂之軒（1883～1963）によるもので、襖の下から3分の1ほどの高さの線は明

中川船番所資料館　企画展
江戸・明治の旅とお金
会期　令和7年1月22日（水）～5月11日（日）

令和6年7月3日、新しい日本銀行券が発行されました。一新されたお札のうち、一万円札の顔となったのが江東区にゆかりがある渋沢栄一です。渋沢栄一は明治9年（1876）から12年間、深川福住町（現永代2―37）に本邸を構えており、この本邸が幾度かの移転を経て令和5年潮見に移築されたことはまだ記憶に新しいことと思います。また、当館で展示している化学肥料・精製糖など区内で創立された近代産業にも渋沢栄一が深く関わっています。今回の企画展は彼が生きた時代である江戸時代・明治時代のお金について紹介しました。江戸時代における三貨制度や明治時代の貨幣制度など、時代とともに変化していく金銭事情を、人々がどのように受け入れていったかを、江戸から盛んに行われるようになった旅を通してたどる展示としました。



展示導入部

展示風景

江戸をとりまく金銭事情

江戸時代の貨幣制度は金・銀・銭による三貨制度と呼ばれています。三貨はそれぞれ独立した価値をもって流通し、幕府によって統合されていました。金は江戸を中心とした東日本、銀は上方（京・大坂）を中心とした西日本で、それぞれ領主・都市に住む人々などの間で主に商取引で使われていました。一方、銭は少額の取引で階層の隔てなく使われました。銭貨は寛永通宝といい、鋳造された銭貨は幕末まですべて「寛永通宝」と総称されました。

寛永通宝を鋳造する場所を銭座といいました。この銭座が一時期亀戸にも存在していました。亀戸銭座では寛文8年～天和3年（1668～83）のほか、元禄10年～宝永元年（1697～1704）、正徳4年～享保3年（1714～18）など何年かに渡って鋳造されていたことが分かっています。

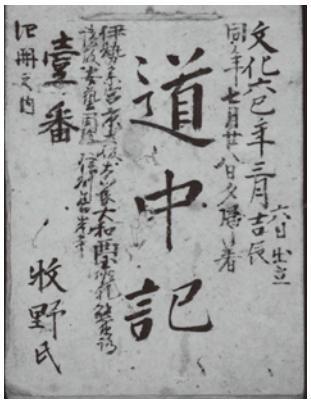
寛文年間に亀戸の銭座で鋳造された寛永通宝は、裏面に「文」の一字があることから「文銭」「文字銭」などといわれました。亀戸銭座ではほかにも裏面に波模様がある四文銭が造られました。

銭座があった場所には、現在モニュメントが建っています。

旅と名所

神社仏閣などの名所・旧跡を参拝する行為は江戸時代後期より盛んに行われるようになりました。江戸時代初期までは商人や巡礼者など必要に迫られて行う人々が旅の主体でした。江戸時代中・後期以降、交通網の整備・貨幣制度の全国的な浸透、現在の旅行ガイドブックの役割を担った名所記・案内記、実際に旅に出た人々が書き記した道中記などの書物による情報発信など、様々な要因を背景に旅に出る人々が飛躍的に増加しました。江戸時代における移動手段は基本的に徒歩ですが、血管のように張り巡らされ発達した舟運も人々の足として利用されました。

寛永通宝（裏面に「文」の一字があります。このほか裏面に波模様がある銭もあります）

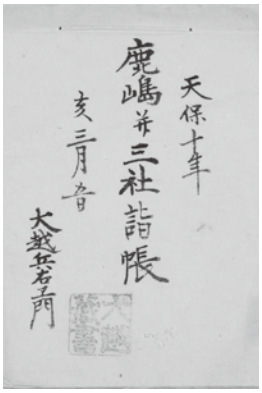


区内に残る道中記
個人蔵

今回の展示では「鹿嶋并三社詣帳」、「成田香取鹿島息栖細見絵図」から東国三社めぐりをとりあげました。

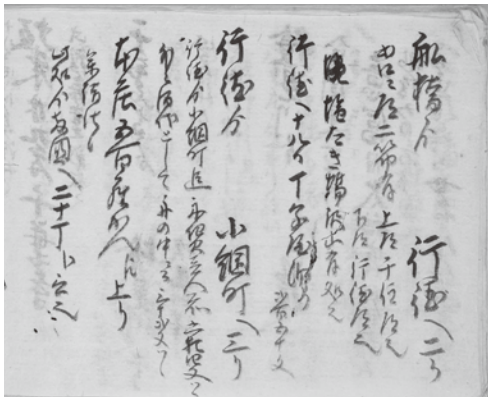
東国三社とは利根川沿いにある鹿島神宮・香取神宮・息栖神社のことです。文人墨客が水郷遊覧に訪れたほか、江戸庶民が信仰と保養をかねた一泊二日の比較的短い旅で訪れました。東国三社参詣の原形は松尾芭蕉の鹿島参詣に求められるといわれ、『鹿島詣』の出版以降、俳人の鹿島詣でが急増したといわれています。また、日本橋小網町の行徳河岸から小名木川を通って行徳（現千葉県市川市）へ向かう定期船が就航しており、江戸庶民はこの定期航路を利用して東国三社などの近郊の寺社を参詣しました。

東国三社めぐりの実例として「鹿嶋并三社詣帳」を紹介します。大越兵右衛門という人が天保10年（1839）3月5日から19日（推定）にかけて東国三社や成田山をめぐった15日間の記録です。大越兵右衛門の出身地は定かではありませんが、道中記の最後から二枚目に、「鹿島参詣道」とあり、「青毛村」（埼玉県久喜市に地名として残っている）からはじまっていること、また権現堂（現埼玉県幸手市）から船で関宿へ渡っていることから、青毛村またはその周辺から出立した人物であると推測されます。



鹿嶋并三社詣帳
江東区教育委員会 蔵

道中記には訪れた場所までの里程（距離）を書いてあるほか、船賃などの道中で支払った金銭が記録されています。記述は江東区域の五百羅漢寺へ詣でたところで終わっています。


「鹿嶋并三社詣帳」のうち五百羅漢寺を詣でたという記述がある部分

江戸時代の旅は目的地（たとえば伊勢参りであれば伊勢神宮）までの間にある寺社仏閣、名所旧跡へ足をのばしながら先へ進む「道中」に重きが置かれていました。また行きと帰りで同じルートをたどらない、一筆書きで大きく弧を描くようなルートをとっていました。「鹿嶋并三社詣帳」も利根川沿いの神社仏閣をめぐった後、房総半島を海岸沿いに一周するようなルートをとっており、資料名のごとく東国三社をめぐった記録ではありますが、記述を見ていくと東国三社以外の様々な場所を訪れていることが分かります。一例としては、「アンバさま」の名で江戸を含め関東周辺で広く信仰された阿波大杉神社や、那古寺、神野寺、千葉寺といった坂東三十三観音などを訪れています。

東国三社めぐりの案内図として「成田香取鹿島息栖細見絵図」を紹介します。この絵図は江戸を出発点と想定して下総国一帯と常陸国の南部を中心に北は筑波山・日光、南は上総一ノ宮まで、江戸からの水路・陸路を詳細に描いた一枚刷りの絵図です。絵図を詳細に見ていくと、江東区域には永代橋、新大橋、萬年橋などの橋の名前、深川、砂村といった地名が確認できるほか、中川番所も明記されています。

成田香取鹿島息栖細見絵図
（近世、江東区教育委員会 蔵）

現在も旅行の際はいかに身軽になるかがポイントになりますが、江戸時代も同じで、「成田香取鹿島息栖細見絵図」のような一枚刷りの絵図は軽量で、かつコンパクトに折りたたむことができ、旅に出る際に重宝しました。その証左に、同様の成田山・東国三社を案内した絵図は現在も各地で確認することができます。板元も一か所ではなく複数あることから、多くの人の手に渡っていたことが推測されます。

（中川船番所資料館　佐藤由梨）

鹿島香取筑波日光参詣順路之図
（元治元年、東京都立中央図書館 蔵）

小・中学生版

文化財を考える

江東区に馬がいたの？

写真1を見てみましょう。この写真はどこを写したものだと思いますか？実はこの写真は、昔（昭和40年頃）の木場を写したものなのです。もっと詳しく見ていくと、馬と荷車、それをひく人が写されています。今の街並みからは想像できない光景ですね。

もともと木場は、江戸時代の元禄14年（1701）、山から伐りだしてきた木材を江戸に運び、これを集める場所を確保するために、木材問屋が現在の木場公園あたりに木置場を作ったのが町の始まりとされています。以降、昭和57年（1982）に新木場に移転するまで木材の街として栄えました。

写真1　「木場の馬車」
（江東区教育委員会所蔵）

写真1は、木場に集められていた木材を運んでいるところを写したものです。江東区に馬がいたの？と思う人も多いと思いますが、実は、戦前（昭和20年以前）の砂町・大島・亀戸・深川一帯には、馬車で荷物輸送をするために牛馬を飼う業者がたくさんいて、3千頭を超える牛馬がいました。また、戦後まもなくまで馬車業は盛んで、永代通り、清洲橋通りに馬がよく見られたという記録があります。

馬に関わる石碑？

たった1枚の写真から、当時の状況とともに木場の歴史まで考えることができました。もう少し馬にちなんだお話をしたいと思います。南砂に、昭和52年（1977）に建てられた「江東馬頭観世音供養塔」（写真2）があります。なお、馬頭観音（馬頭観世音と同じ）とは、馬が死亡した際に、人々がこれを供養するために建てたもので古くから存在します。ちなみに、区内には複数の馬頭観音が残されています（「区内の馬頭観音供養塔」本紙No.306）。

なぜ建てられたのかな？

供養塔の隣にある「江東区馬頭観音由来碑」には、供養塔が建てられた由来と、戦前の江東区の馬車業について刻まれています。これによると、昭和20年（1945）の東京大空襲で犠牲となった約3千頭もの牛馬を供養するために建てられたものです。さらに、馬は軍馬として戦場に行き戦死しました。このことから、同28年（1953）に、供養と平和祈願を目的に建造されました。なお、この供養塔は、現在も関係者や地域の人々に大切に守られています。

写真2　「江東馬頭観世音供養塔」
（東京都トラック協会蔵）

なぜ文化財になっていないの？

以上のように地域の歴史を知る上で大切な供養塔であるにもかかわらず、現在文化財に登録されていません。みなさんの中に、なぜ？という疑問が沸いてきたのではないでしょうか？

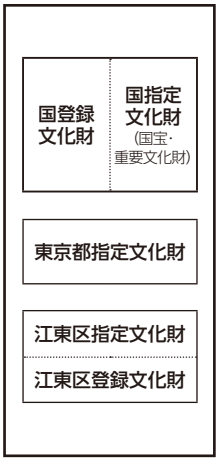
この理由のひとつに、「建てられた時代」があります。以前は、戦前（昭和20年以前）のものを文化財として認めていましたが、現在では、昭和40年（1965）頃までとしています。時代は常に移り変わっていきます。やがて、私たちが生きるこの時代も歴史の1ページになっていくのです。このことから文化財として認める年代も時代を経るごとに下げていく必要があります。

祖先がつくり・残した意味は？

50年もすると地域の歴史を知る人も少なくなり、100年たてば、実際にその場所で生活した人々もいなくなります。今回お話してきたことも同じです。今となっては、区内に馬がいたことを知る人もほとんどいませんが、こうした供養塔が残されていることで、私たちは、その地域の歴史・文化を正しく知ることができるのです。

まずは身近にある古くから伝えられている「もの」に気付くことが大切です。そこからこれに向き合って、祖先が現代の私たちに何を伝えているのかを感じ取らなければ、何も分かりません。もの自らは、何も語ってくれません。是非、みなさんもこうしたものを発見して対話をしてみてください。深い何かを得られるはずです。

（文化財専門員　大関直人）

※お詫びと訂正

前号（No.309）8頁「図2」の表記に誤りがありました。ここにお詫び申し上げ、左図の通り訂正いたします。